

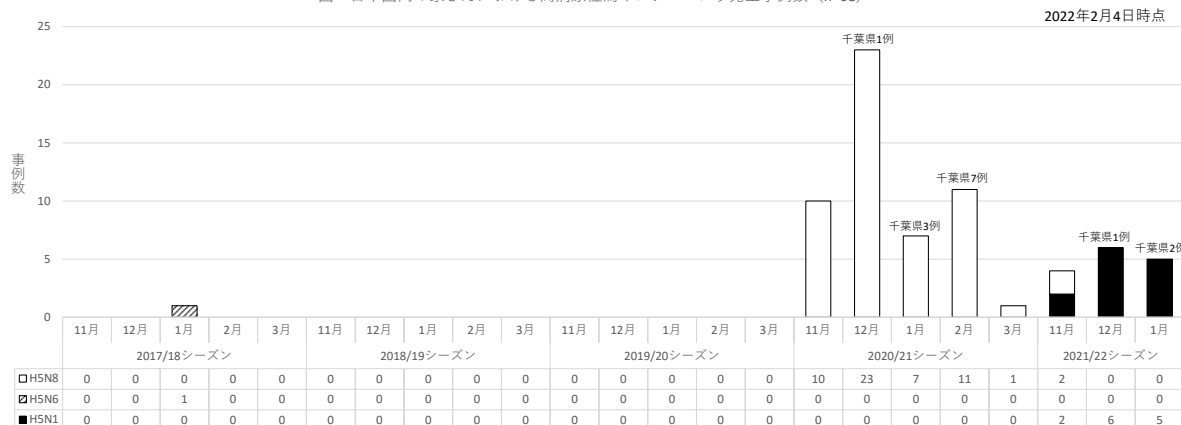
### 【今週の注目疾患】

#### 《鳥インフルエンザ A (H5N1)》

2022年1月に鳥インフルエンザ A (H5N1) の鳥類患畜が県内で2例報告された。令和3年度(2021/22シーズン)の県内累積報告数は3例となった。2例目の発生場所は八街市で、1月19日に肉用鶏が疑似患畜と確認された。1月24日に当該施設における防疫措置(殺処分及び施設の清掃・消毒等)が完了した。3例目の発生場所は匝瑳市で、1月26日にあひるが疑似患畜と確認された。1月27日に当該施設における防疫措置が完了した<sup>1)</sup>。なお、人への感染は報告されていない。

日本では、平成29年度(2017/18シーズン)から令和3年度(2021/22シーズン)までの間に68事例の報告があり、全て11月から3月の期間に報告されている。令和2年度(2020/21シーズン)は全国で52事例の高病原性鳥インフルエンザの家きん等感染事例報告があった。亜型は全てA(H5N8)であり、うち11事例(21%)が県の事例であった。令和3年度(2021/22シーズン)は全国で15事例が報告されており、うち3事例(20%)が県の事例であった。15事例の亜型はA(H5N1)が13事例(87%)、A(H5N8)が2事例(13%)であった。県の事例は3事例ともにA(H5N1)であった(2022年2月4日時点)<sup>2)</sup>(図)。

図：日本国内の家きんにおける高病原性鳥インフルエンザ発生事例数 (n=68)



近年は、N7を除くN1-N9 NA亜型の高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)を引き起こすA/H5亜型ウイルスが家きんや野鳥に蔓延し、2020年9月以降、世界各地の家きんや野鳥からA/H5亜型ウイルスが検出され、2016/17シーズン以来の大流行となっている<sup>3)</sup>。

A/H5亜型ウイルスのうち、人感染例の報告があるのは、HPAIのA(H5N1)、A(H5N6)、A(H5N8)ウイルスである<sup>3)</sup>。いずれもほとんどが家きん等の鳥類との濃厚接触歴がある症例であり、これまでに持続的な人-人感染例の報告は確認されていない<sup>4)</sup>。

世界保健機関(WHO)によると、2003年以来、世界中で合計863例の高病原性鳥インフルエンザA(H5N1)の人感染例が報告されている。最近では、2022年1月6日にイギリスから国内初となる高病原性鳥インフルエンザA(H5N1)の人感染例の報告があった<sup>5)</sup>。

ヨーロッパ地域では2021/22年シーズンに野鳥や家きん等の高病原性鳥インフルエンザA/H5亜型の発生が増加している。本症例についても、飼育していたアヒル複数羽から高病原性鳥インフルエンザA(H5N1)が検出された後、人感染が確認された。当該感染者は個人用防護具(PPE)を着用しておらず、室内の閉鎖的空間で多数の罹患した鳥類との濃厚接触が疑われた<sup>6)</sup>。

鳥インフルエンザは主に鳥に対して感染性を示すA型インフルエンザウイルスの人獣共通感染

症である。A型インフルエンザウイルスはウイルスの表面にあるたんぱく質HA（ヘマグルチニン）とNA（ノイラミニダーゼ）の性状により、16のHA亜型と9のNA亜型に分類され、感染性や重症度は感染した動物やウイルスの系統によって異なる。16のHA亜型のうち、これまでH5亜型とH7亜型から高病原性鳥インフルエンザウイルスが出現している<sup>7)</sup>。国の感染症法ではA（H5N1）とA（H7N9）鳥インフルエンザが2類感染症に指定されており、それ以外の亜型の鳥インフルエンザは4類感染症に指定されている。

鳥インフルエンザは感染した鳥やその排せつ物、死体、臓器等に濃厚接触したなど特殊な状況を除き、通常人に感染することはほとんどないと考えられている。しかし、人が鳥インフルエンザA（H5N1）に感染した場合には、重篤な症状になることが多い<sup>4)</sup>。また、野鳥や家きん間で感染を繰り返すうちにウイルス変異が生じ、新たな特性を有する高病原性ウイルスが出現する可能性も否定できないため、注意が必要である。

現時点で認可されているワクチンはない。日常生活においては、野鳥など野生動物の排泄物に触れた場合には、手洗い・うがいをすることが基本的な予防対策となる。また、野鳥やその死体は体内や羽毛などに細菌や寄生虫などの病原体を持っていることがあるため、素手で触らないようにすることが重要である<sup>7)</sup>。

なお、鳥インフルエンザが発生した場合でも家畜伝染病予防法により感染が確認された鶏の肉や卵が市場に出回ることはない。また、内閣府食品安全委員会は万が一鶏肉・鶏卵に鳥インフルエンザウイルスが存在したとしても、熱や酸に弱いことから、十分な加熱調理や胃酸などの消化液により死滅するため、鶏肉・鶏卵を食べることにより感染することはないという考えを示している<sup>2)</sup>。

#### ■参考

1) 千葉県：高病原性鳥インフルエンザについて～県民の方々へ～

<https://www.pref.chiba.lg.jp/chikusan/toriinfluenza/index.html>

2) 農林水産省：鳥インフルエンザに関する情報

<https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/tori/>

3) 国立感染症研究所：IASR Vol. 42, No.11 (No. 501)

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/iasr-vol42/10799-idx501.html>

4) 厚生労働省：鳥インフルエンザについて

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000144461.html>

5) WHO：Influenza A (H5) -United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland

[https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/influenza-a-\(h5\)-united-kingdom-of-great-britain-and-northern-ireland](https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/influenza-a-(h5)-united-kingdom-of-great-britain-and-northern-ireland)

6) ECDC\_Eurosurveillance：A case of avian influenza (H5N1) in England

<https://www.eurosurveillance.org/content/10.2807/1560-7917.ES.2022.27.5.2200061>

7) 千葉県：野鳥における鳥インフルエンザについて

<https://www.pref.chiba.lg.jp/shizen/choujuu/toriinfluenza.html>